「知らないうちの愛」

マルコの福音書１４：１２－３１

November.15.2026

今朝は聖餐礼拝ですので、イエス様が執り行れた最初の聖餐式が記録されている聖書の御言葉から恵みを頂きたいと思います。

マルコの福音書１４：１２－３１（パワポ）

Preface

主イエス様が、十字架に架かられる前の最後の食事を弟子たちと取っておられる場面です。

３年間寝食を共にした弟子たちとの最後の食事、所謂、最後の晩餐です。

いよいよイエス様が、十字架に架けられるという直前の食事を弟子たちとともにしておられるこの場面を一人黙想していますと、こんな思いが静かに湧き上がって来ました。

「僕たちは人生を生きていく中で、どれだけの『知らないうちの愛』を受けながら生きているのだろうか、生かされているのだろうか」という思いです。

知らないうちの愛。

今、弟子たちは、何も知らないで、何も理解しないで、神の子羊主イエス様のからだと血を表すパンとぶどう酒を頂いております。

イエス様は弟子たちと取る最後の食事の時を通して、弟子たちに究極の愛をお示し下さいました。

彼らの罪を取り除くために、罪なき神の子羊主イエス様が、彼らの罪の代価として十字架に架けられ、身代わりの罪の贖いを果たすという愛です。

ここで興味深いのは、その愛をお示しになるために用いた方法が、私たち人間の日ごとの糧である食事だということです。

人は、動物や植物などの犠牲の命を体に取り入れることによってのみこの肉体を保つことが出来ますが、まさに食事という命の営みに必要不可欠な場をお用いなさって、人が真に生きるためには、イエス様のいのちを食さなければならないことを教えて下さいました。

食すという、命の営みの中で最も基本的で最も大事なこと。

それなくしてはこの体の命を保つことが出来ないように、人が真に生きる、霊が生きる、滅びゆくこの肉体で終わる命ではなく、栄光のからだに変えられることを約束された霊肉ともに生きるいのちは、イエス・キリストの十字架の贖いを我が罪の身代わりと信じることによってのみ成されるんだということをお示しくださいました。

Part One

これまでエペソ書で学んで来ましたように、人は生まれながらにして神の御怒りを受けるべき子らとして生まれて来る、生まれながらの罪人です。

誰かしらから教えられることなくとも、嘘をつきます。
誰からも教えられることがなくても、人のものを羨み、欲しいと思います。

また、自分の思い通りにならないと怒りが湧いてきます。
自分の考えることが正しいと、普通に思えてしまいます。
誰かと自分を比較して、自分の劣っているところを正直に素直に認めて遜る代わりに、譲る代わりに、自分よりも劣っているところを他者の中に見つけ、上に立ち、優位になろうとし、見下し、さばき、正義感ぶって人の悪いところをよく指摘し、正義と公正をしている気になります。

人と競争し、比較せずにはいられません。
比較や競争をして勝ることを通してでしか、自分の優れているところを見出す方法を知りません。
批判することをもってでしか、自分の正しさを証明し、主張する方法を知りません。
そんな批判が出来る自分のことを正しいと、真顔で思ってしまいます。
「その批判を受け入れることが出来ない相手が悪い」と、本気で思ってしまいます。

時に、やる気や情熱に包まれると、そのやる気や情熱から出て来る意気込みや自分の言葉に陶酔し、自信が溢れ出てきます。
自ら発する自信や意気込みに飲まれてしまっているということにさえ気づかずに、その自信と意気込みを本物だと思っています。
そしてまた、その自信と意気込みをもって、愛すべき一番近くにいる人にでさえも比較をし、競争をし、自分の優位性を主張します。
犬も喰わぬ夫婦喧嘩や、同僚同士、仲間同士、教会員同士の争いやいざこざも、これに入るのかもしれません。
正義感に満ち溢れ、自らの忠実さや誠実感に飲み込まれ、ほかの人が見えません。

クリスチャンであっても、「ほかの人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」（ピリピ２：３）というイエス様のお言葉、お姿、生き方に倣う、倣いたいという気持ちはなくなってしまい、イエス様に赦され、イエス様に愛され、またイエス様が好きで、唯一の神を礼拝する、礼拝している信仰者であるということが、知ってか知らずかいつの間にか、自分の中で、自分で自分を肯定する力のようなものとなって、あらぬ方向へと信仰が向かい、主の御前に遜ることを忘れます。
遜ることが出来ません。

正にこれが、私たち罪人の罪なる姿、罪なる性質なんだと思います。

そして、そんな罪なる姿を臆することもなくよく露呈してくれているのが、今日の聖書箇所に出てくるイエス様と最後の晩餐の時を過ごし、最初の聖餐式の場にいる１２弟子たちのように思えてきます。
もし気付いているならば、恥ずかしくて隠してしまいたいようなドロドロとした巧妙にも見える内なる罪の姿を臆面もなく露わにして、本当に感謝なことだと思いますが、私たち自身の姿をも顧みさせてくれるように思います。

マルコの福音書１４：２７－３１

リーダーペテロを含めた１２弟子皆が、「まさかこの私がそんなことをするはずはありません。決してイエス様のことを裏切るようなことは致しません」と、自信と意気込みに満ち溢れ、息巻きながらイエス様に言い返しました。
同じ内容をルカの福音書で見ますと、彼らは議論まで始め、「自分たちの中でだれが一番偉いのか」という話にまで展開させて行きます。
今まさに、イエス様が、明日には十字架に架けられるというのにです。

イエス様から、「一番偉いと思う人は、一番経験の浅い若者のようになり、上に立つ人は、給仕する者のようになりなさい。わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています」と、比較して、人に優劣をつけようとする彼らの罪なる思いや行いが間違っていることを分かりやすく諭して下さいましたが、それでも、弟子たちは、その言葉の意味が分からなかったのか、分かろうとしなかったのか、受け入れようとする様子はありませんでした。
イエス様が究極の給仕をなさろうとしている十字架の死の意味を知らないだけでなく、このほんの少し前には、イエス様が弟子たち一人一人の汚い足をきれいに洗って手拭いで拭いてあげた、「ほかの人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」という愛の行いの真意を知ろうともせず、そこにある愛に倣おうとも思えませんでした。

そして同じく、イエス様が最後の食事の中で弟子たちに裂いてお渡し下さったパンの意味も、杯を取って飲むようお与え下さったブドウの実からできた赤い血のような飲み物の意味も、この時点では、全くもって知らず、分からず、悟ることが出来ませんでした。
意味も知らずに、自分たちのために裂かれるイエス様のからだを、弟子たちの身代わりに流されるイエス様の血潮を食したのです。
自分たちの罪を取り除くために、父なる神がご用意下さった屠りの神の子羊がイエス・キリストであり、今まさに、そのイエス・キリストが、神の究極の愛を明らかにするために十字架に架かられることを知りませんでした。
知ろうともしませんでした。

Part Two

ご自分のことを銀貨３０枚で売り飛ばし、裏切りを働こうとしているイスカリオテのユダを含め、イエス様が愛した１２弟子たちすべてが、あれだけ息巻いて、自信に溢れ、意気込みに満ちていた姿はどこへやら、罪なきイエス様があらぬ濡れ衣を着せられ捕らえられて行きますと、旧約聖書ゼカリヤ書の預言通り、羊のように散って行き、逃げて、隠れてしまいました。

あんなにも競争するかのように口をそろえて、「まさか私ではないでしょう。イエス様あなたのことを知らないなんてことは決して申しませんし、たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、私はそのように致します。この人たち皆がそうであったとしても、私は違います」と血気盛んに言っていたのに、皆一様に「知らない」と否定し、キリストに従うキリスト者であることを恥じ、隠し、逃げて行きました。

まんまと、サタン悪魔の常套手段でもある、自信と意気込みに丸め込まれて行きました。

自信と意気込みで人をさばき、愛ではなく、恐れと臆病の霊に包み込まれてしまう。

イエス様は、そんな知らないだらけの弟子たちのために、「これは、あなたがたの罪のために引き裂かれるわたしのからだです。この杯は、あなたがたの罪のために流されるわたしの血潮です。これを食しながら、また、これから食すたび毎に、わたしゆえにあなたがたの罪は赦され、神の国に、神の民として、神の子として入れられることを覚えなさい」と語りながら、最初の聖餐式を執り行って下さいました。

今日の説教題を「知らないうちの愛」としましたが、まさに、誰にも知られない、知ってもらえない、分かってももらえず、理解してももらえないうちに成して下さったイエス様の愛です。

Part Three

知らないうちの愛。

実のところ、本当の愛とは、愛と言われるもののすべては、「知らないうちの愛」なのかもしれません。

愛とは、知ってもらうことを目的としているのではなく、ただその人が大切で、ただその人が自分のいのちに代えてでも守りたい存在である。

ただその人が大事で、大事であることを、自分の身を切ってでも削ってでも体現したい。

知ってもらうことが目的なのではなく、理解してもらって自分を認めてもらうことが目標でもなく、ただ愛しているということ。

イエス様がして下さった最初の聖餐式には、「知らないうちの愛」に満ち溢

れていたのだと思います。
　この御言葉を黙想していますと、「イエス様は誰にも知られない中で、愛を成して下さっていたのか」と、申し訳なさとともに、自分の頭を叩いて、跪きたいような気持ちになりました。
　「確かに僕も、知らないうちにこの愛を受けていた。知らないうちに受けたこの愛ゆえに、死を恐れるところから解放され、自分の愛の無さに気付かされた。
　愛の無さに気付かされたからと言って、愛がないことに開き直るのではなく、それまでは平気で開き直り、開き直ることに潔さやカッコよさまで覚えていたような奴だったけれども、愛がなくても、イエス様のように愛したい。
　イエス様のように愛す者になりたい。
　愛することが全てだということを認め続けたい、あきらめない人生を生きたい。途中で放棄することなく…」と、イエス様が施して下さった最初の聖餐式にあらわれる「知らないうちの愛」に、ただただ降参降伏するしかない思いが湧いてきました。
　そして、ローマ書５章の御言葉が思い出されました。

ローマ人への手紙５：６－８（パワポ）

　自らの自信と意気込みばかりを動機にして、それに丸め込まれながら生き、自分の考えと思いと正義感を正しいと見なす、神の愛など知る由も知ろうともしなかった不敬虔な罪人である私（私たち）のために死んでくださったイエス様の愛。
　「神の、イエス様の『知らないうちの愛』が私を生かしてくれた、生かしてくれている」と、ひれ伏すしかありません。

　すべての人は、この神の「知らないうちの愛」を受けて、生きております。
　そして大概、その愛は、人の手を通してやって来るのだと思います。
　一緒に働く同僚の手を通して、一緒に生きている家族の手を通して、一緒に楽しんだり、悲しんだり、喜んだり、嘆いたりする仲間や友人やご近所さんを通して、すぐ近くにいる人を通して、あるいは、未だ会ったこともない、出会ったこともない、話したことも、触れたこともない人までも通して、「知らないうちの愛」を受けて、私たち皆生かされているのだと思います。

　聖餐式に与るたびに、イエス様が私たちのために成して下さった「知らないうちの愛」を思い起こす。
　今もイエス様がお造りになった沢山の人々の手を通して、沢山の人々の知らないうちの愛によって今を生きている、生かされているということを覚える、感謝する、認める、それゆえに遜る、これが、イエス様が私たちに望んでおられることではないでしょうか。

また、私たちの中に、今まさに、「知らないうちの愛」を実践しながら生きておられる方々もいらっしゃることでしょう。

気付いてもらうこと、理解してもらうこと、知ってもらうこと、今受け入れてもらうことを目的としていない愛、今は気付いてもらえない、今は理解してもらえない、今は受け入れてもらえない愛を生きようと、実践しようとしておられる方々がおられることでしょう。

でも、その愛、神は知っておられます。

誰よりもよく知っていて下さいます。

なぜか？

究極の「知らないうちの愛」を行われたお方が、唯一まことの主なる神様、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神様だからです。

「知らないうちの愛」には、必ずや痛みが伴うでしょう。

「知らないうちの愛」には、非常な忍耐も求められることでしょう。

「知らないうちに愛」には、自分を殺すことが必須でしょう。

でも、「知らないうちの愛」には、必ずや、知られる時が来ます。

報われる時が来ます。

その愛する人の悟りを、理解を得られる時が来ることでしょう。

もし来なかったとしても、その愛が、「知らないうちの愛」であるならば、神様が報いて下さり、神様が「知っている」と、「分かっている」と静かに語りかけて下さいます。

「わたしは、わたしの民の苦しみを確かに見、叫びを聞き、痛みを確かに知っている」と出エジプト記３：７で仰っておられる通りにです。

## Conclusion

最後に、聖書の中には、イエス様に倣って、「知らないうちの愛」に生きた人々がたくさん登場してきますが、その内の一人の話をして終わりたいと思います。

使徒の働きに出て来るステパノです。

ステパノは、イエス様の愛を、イエス様の救いを人々に宣べ伝えましたが、人々の大反対に遭い、石を投げつけられて殉教していきました。

最後息を引き取る前に、ひざまずいてこう祈りながら、死んでいきました。

「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」

イエス様が十字架上で亡くなる直前に祈られた祈りと同じ内容の祈りを献げながら、死んでいきました。

そして、そのステパノの死に立ち会い、賛成し、扇動していた人が、後にパウロと呼ばれるサウロです。

ステパノの「知らないうちの愛」によって、祈られ、愛され、救われた者が、殺人者サウロであり、後に、新約聖書の半分以上を記すキリストのしもべが、大使徒パウロ先生でした。

キリストの愛は、知らないうちの愛であり、イエス・キリストが私たちに求め、期待しておられるのも、知らないうちの愛です。

知らないうちの愛、これが、私たちの生き方であれればなんと幸いなことかと思います。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書５：８